

KOSEN の窓

学校と地域の連携、今ではごく当たり前のこと。大学、高専のような高等教育機関でも、地域への貢献、連携が叫ばれ始めた平成15年春のことです。大牟田市や商工会議所などが中心となり、「有明高専の技術を生かしてシンボリックな動く大蛇山を作っていただけないか」という企画が提起されました。

企業などからの募金を基に「ロボット大蛇山プロジェクト(ロボ大蛇)」が発足。高専で製作プロジェクトを結成し、まとめ役を私が拝命しました。地域連携で、特に大専で難しいのが民学連携。案の定、まず設計が難しく、大蛇山六山振興会との折衝や、観光プラザの大蛇を学生にデッサンさせるなど大変でした。大蛇山そのものが架空のものだからです。でも、この種の接触こそが地域連携だと気づき、基本設計が完了しました。

次の製作の中心になったのは、各学科所属の技術職員、補佐する教員、学生有志です。ロボ大蛇のような具体的な問題に取り組むことで、それぞれが、実学と、総合問題の難しさ、重要性に気付きました。

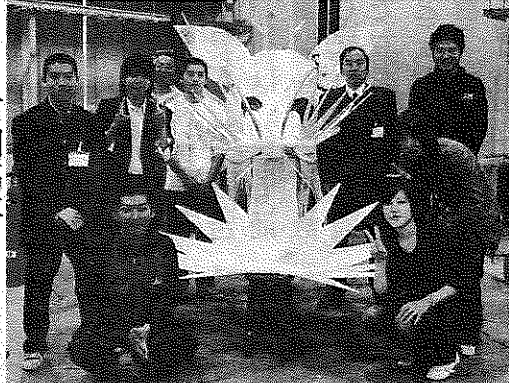
翌年、本校技術職員が全国高専に先駆けて技術の先進化、多様化へ対応する。本校技術職員が取り組むことで、それぞれが、実学と、総合問題の難しさ、重要性に気付きました。

これを有明高専から、つことが知られていない。昭和三十八年、新しい教育機関である高専をぜひこの地に」という地元の熱い願いで、有明高専は創立されました。敷地が2県2市をまたいだ全国でも唯一の高専です。県境、市境の地は、昔から独特の文化をも

民学事始め「ロボ大蛇製作ものがたり」

有明高専名誉教授 川崎 義則

有明高専



製作されたロボ大蛇(塗装前の白大蛇)

(不定期掲載)